

2023年2月分総評 杉本真維子

「どうしたらいいの／起きられない朝のために／毎晩ひつぎに入る」植村日向（愛知県）  
何かを逆手にとって、死のほうから「起きられない朝」を語っています。どこか開き直ったような「言いつぱり」にも好感を覚えました。

「海につづく坂／を／駆け下り 夏を抱く／すべての樹々が眼に痛かった」さいう（愛知県）

高台から見下ろす視界いっぱいの海が全身にぶつかってきて、「夏を抱く」とはこういうことなんだと思わせます。比喩が単なる比喩に終わっていません。

「消灯、孤独も黙って寝ろ」小沢旭（山梨県）  
夜更かしへの欲望をねじ伏せ、孤独を叩きのめし、問答無用に人を床に就かせる「消灯」の恐るべき力がここにあります。

「したくないことが増えたら／ぎちゃぎちゃとさわいで進む／じてんしゃになる」松下誠一（東京都）  
にぎやかな「じてんしゃ」が孤独を癒すように走っています。こんなふうには走っていたことが私にもあるような気がするのです。

「戦争の跡地に咲いた向日葵の／勝手に意味を背負わされる夏」源楓香（北海道）  
たしかに、勝手に意味を背負わされるほうはたまったものではないですね。ただ書かれるだけの側に立つことで初めて詩の言葉は生まれてくるのかもしれない。

「リフトから帽子振り合う春スキー」篠遠早紀（東京都）  
シンプルですが、抽象と捨象を感じさせる作品です。帽子を振り合うひとたちのすがたが静止画のように切り取られています。優れた絵画のワンシーンのようでもあります。

「パック寿司を食べ終わった／プラ容器のような気持ち」加藤万結子（愛知県）  
「プラ容器のような気持ち」としか言いようのない気持ちがたしかにあるのだと思いました。ほんとうは、名づけられる感情よりも名づけられない感情のほうが多いということが、私たちが詩歌を必要とする理由の一つでしょう。

「街のかたちに雪が積もる／私のかたちに雪がへこむ」立花ぼとん（東京都）  
世界の違和としての「私」がへこみから立ち上がります。互い違いだったり、凸凹だったりする現実をかるやかに渡っていきます。

「トビウオは／トで踏み切って／ビウと飛び／オの口のまま海になること」永山逢海（神奈川県）  
トビウオのダイナミックな跳躍が音節から立ち上がります。海と空をつなぐトビウオのすがたが生命そのもののようによまぶしいです。

「日が昇る／覚悟ならもうできている／米を研ぐ手は獣のかまえ」汐見りら（東京都）  
人間もまた動物である、という言い方が社会のどこにもささらない今、「獣のかまえ」は貴重です。それが地球上のあちらこちらの台所から影絵のように立ち上がって、なんだか陶然としました。張りつめた野性がからだのどこからか湧き上がるようでもあります。

前回に引き続き、全体的に作品のレベルが一段上がったという印象をもちました。秀作のなかには初めて拝見するお名前も数多くありました。次回も投稿を楽しみにお待ちしております。